

かっぱのこうら

むかし、新郷の大辰おほしげの家に二十才位の男の奉公人ほうこうにんがおりました。この男はとてもまじめでよく仕事をするので主人からも信頼され、他の奉公人からもしたわれていました。それに暇があると利根川を渡って一人で任んでいる年若い母親の所へ出かけていく孝行息子でもありました。

ある日の夕方、いつもの様に老母のもとへ行こうと利根川を舟でわたりはじめましたがどうした事か途中で川へ落ちてしまいました。水かさは増しており、舟は男からどんどんはなれていきます。男は夢中で泳ぎました。もうすぐ岸という所で、あたりに急に波が立ちはじめ「ブクブクブク」と何かが浮び上がって来ました。それは、大きな大きな亀かめでした。男はびっくりして逃げましたが、大亀は男めがけて追って来て、とうとう男の背中にだきつき、今まさに男をくい殺そうとしました。男はもう逃げられないと思ひ、腹の刀を抜き方一杯背中の大亀につきさしました。何回も何回も夢中でつきさしました。背中にだきついた大亀が弱ったところを、そのまま岸にさがり自分の帯をとい

大亀を近くの松の木にしばりつけ、やっとのことで、家に帰りました。

翌朝、奉公先の家に帰ろうと岸辺に来てみると、大亀は死んでいました。男は大亀をもって帰り主人にわけを話しました。みんな大亀の死体をみて、びっくりし、何事もなく無事であった事を喜びました。これも、常日頃の親孝行のおかげとこの男をはめました。主人はこの亀のこうらを二つに切って半分は自分の家に、残りの半分は男の老母のところへ持っていき親孝行の証拠としたそうです。この主人の家には半分のこうらが今でも大切にしまっているとの事です。

☆大亀とは俗に「かっぱ」とも言います。



